



風疹について

風疹は、風疹ウイルスによって引き起こされる急性の発疹性感染症です。近年患者数が増えており、ワクチン接種を受けることが推奨されているのをテレビや新聞で見たことがある人も多いのではないのでしょうか。今回、どのような人がワクチン接種を受けなければいけないのか、受けるにはどうしたらよいかなどをお伝えしたいと思います。

●風疹にかかるとどうなるの？

風疹に感染すると、約 2～3 週間後に発熱や発疹、リンパ節腫脹などの症状が現れます。軽症であることが多く、不顕性感染（感染症状を示さない）の場合もあります。ただし、まれに重篤な合併症である脳炎や血小板減少性紫斑病を発症することがあり、軽視はできません（重篤な合併症を発症するのは 2000～5000 人に 1 人といわれています）。また、大人がかかると、子供に比べて発熱や発疹が長く、関節痛を認めることがあります。



風疹ウイルスの感染経路は飛沫感染（咳、くしゃみなどによる感染）で、人から人へ感染が広がります。発疹が出る前後約 1 週間は人に感染させる可能性があるため、その間はできるだけ外出しない、マスクを着用することが必要となります。

また、風疹に対する免疫が不十分な妊婦が、妊娠 20 週頃までに風疹ウイルスに感染すると、眼や耳、心臓などに障害をもつ先天性風疹症候群の子供が生まれてくる可能性があります。先天性風疹症候群は具体的に白内障、感音性難聴、動脈管開存症、精神運動発達遅延などといった症状を認めます。妊娠初期に風疹に感染すると、胎児に影響が出る確率は 50%～85%と高く、妊婦は風疹にかからない努力が必要となります。妊婦の同居家族も、風疹にかからないよう予防する必要があります。

●風疹にかからないためには？

風疹に対する特異的な治療法はなく、風疹にかかった場合は、発熱や関節痛に対して解熱鎮痛剤を用いるなどの対症療法が行われます。そのため、ワクチンによる予防が重要となります。

日本では、1 歳と小学校入学前の 1 年間で、2 回の定期接種が行われています。風疹ワクチン（麻疹風疹混合ワクチンも風疹に対して同様の効果）を接種することで、95%以上の方が風疹ウイルスに対する免疫を獲得できるといわれています。2 回の接種で、1 回の接種では免疫を獲得できなかった人の多くに免疫を獲得させることができます。また、接種後年数を経ることで免疫が低下した人は、追加のワクチンを接種することで免疫を増強させることができます。

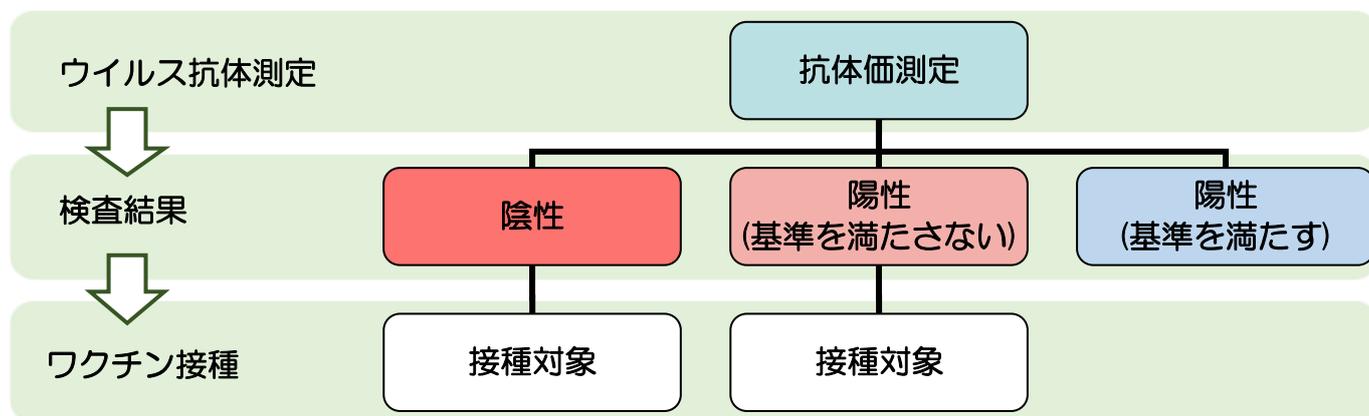


過去に風疹ワクチンの接種を2回以上行っていない場合と、風疹にかかったことがない場合は、予防接種を受けることが重要です。医療・教育関係者、海外渡航する方には特に予防接種を推奨しています。また、妊娠中の女性はワクチン接種を受けることは禁忌とされているため、非妊娠期に予防接種を受けることが推奨されており、接種後2ヶ月間の避妊が必要となります。

● 予防接種を受けるには？

まず予防接種を受ける必要があるかを調べるために、風疹の抗体検査を受けていただきます。抗体検査で十分な量の抗体があれば風疹への免疫があるため、予防接種は不要となります。抗体検査は、健康診断や人間ドック、お近くの医療機関で受けることができます。桐生厚生総合病院では、有料となりますが、お手軽検査にて風疹の抗体検査を行っています。

検査結果を聞き、免疫がない場合（十分な抗体がなかった方）は、予防接種を受けることをお勧めします。



● 昭和37年度～昭和53年度生まれの男性の方へ

この年代の男性には、過去に公的に予防接種が行われていません。そのため、お住いの自治体から、原則無料で風疹の抗体検査と予防接種を受けることができるクーポン券が送られています。自分が風疹にかかり、周りの人に広げてしまわないためにも、風疹の抗体検査と予防接種を受けることをお勧めします。詳しくは厚生労働省のホームページをご覧ください。



「四つ葉のクローバー」は当院のホームページ（インターネット）で公開しています。ご参照ください。

ホームページアドレス <https://www.kosei-hospital.kiryu.gunma.jp/>